

こんぶくろ池通信

NPO 法人こんぶくろ池自然の森
Tel: 04-7132-8800
Fax: 04-7132-8806
Email: info@konbukuroike.com
URL: <http://www.konbukuroike.com>

2026年7月

第147号

6月5日（金） 千葉大学「環境緑地学実習」

上田真佐江

昨年度に続き、今年度も千葉大学大学院園芸学研究科ランドスケープ学コース高橋輝昌教授から、園芸学部緑地環境学科2年生がこんぶくろ池自然博物公園を見学する際の案内と説明の依頼をいただきました。当園での「緑地環境学実習」をNPOがお手伝いするのはこれで2度目になります。

実習当日の6月5日(金)は晴れて見学日和。13時より千葉大学柏の葉キャンパス講義室で40分ほどNPOがこんぶくろ池自然博物公園について説明し、その後、現地を見学して16時頃には柏の葉キャンパスに戻る行程です。受講者は、専門課程を学び始めた大学2年生約70名。引率として高橋輝昌教授、梅木清教授、百原新教授、ティーチングアシスタントの大学院生1名がご参加。NPOからは萩原さん、中川望さん、上田、そしてサポーターとしてNPO活動に参加している千葉大学大学院生1名も加わり計4名で実習をサポートしました。

講義室では、先ず萩原さんが当園の基本情報とNPOについて説明しました。こんぶくろ池自然博物公園は特徴ある湧水を有し、暖温帯にもかかわらず冷温帯の植物群が生育する珍しい植生の森がTX柏の葉キャンパス駅の徒歩圏から広がっています。立地、土地利用の変遷、森を取り巻く柏の葉地域の開発など当地の紹介に加え、保全や調査、環境教育を行っている当NPOの活動も紹介されました。次に私からは、園内の動植物を把握するために行っている調査と環境教育、調査結果の保全活動への活用、水環境の現状、来園者がスズメバチの被害にあわないための取り組み、ナラ枯れの状況などを紹介しました。

NPOからの説明後は1号近隣公園に移動し、ゴルフ場跡地で二次遷移が進行する様子、ゴルフ場時代に利用されなかった場所に残る貴重種の群、秋水燃料庫などを見学。こんぶくろ池を含むエリア周囲の道路工事現場では、たくさんの様々な破片が露出しており、公園の一部にごみが投棄された時代があったのだとうかがい知ることができません。学生さん達は撮影したりメモしたりとスマートフォンを活用して熱心に見学していました。ナラ枯れや、湧水のしくみと水質の特徴についてなど、実物を見てこそその質問も出ていました。管理棟前ではタヌキが通過する幸運もあり、ウサギの糞、掩体壕も見学し、動植物のようすや歴史遺産に触れながら進んだコースの終盤で、交通事故にあった(?)ウサギが無残に横たわっており、街にある森ならではの光

景にも出会いました。見学中には学生さんから、広い場所の保全是大変そうだという声も出ました。この見学を通して学生さん達が少しでも現場から得たものがあつたなら幸いです。受講した学生さん達には、大学からのこんぶくろ池自然博物公園での調査や、あるいはNPOへの活動参加など、別の形でまた会えることを期待しています。



3月29日(日) こんぶくろ池保全活動報告会より コバギボウシとキンランの開花株数調査(2025年度)

2006年から開花株数調査が開始され継続している。その中でコバギボウシとキンランについては、「千葉学ブックレット 都市と自然環境-4 市民の力で湧水自然を守る・柏市こんぶくろ池物語 2011年初版」の中に書かれた「完全に林冠が閉鎖した暗い林内ではなく林冠のところどころにすき間(ギャップ)があるやや明るい光環境が、コバギボウシやキンランの生育に適しておりそれ以外の植物の多様性をも高めることを意味しています」との研究成果に基づきコバギボウシを湿性環境、キンランをコナラの優占する落葉広葉樹二次林の生物多様性の豊かさの指標として経年変化を観察している。

方法 北地区（こんぶくろ池自然博物公園のうち1号近隣、コリドーを含まないエリア）を弁天湿地、こんぶくろ湿地、その他の3地区に分け開花株数を数えた。

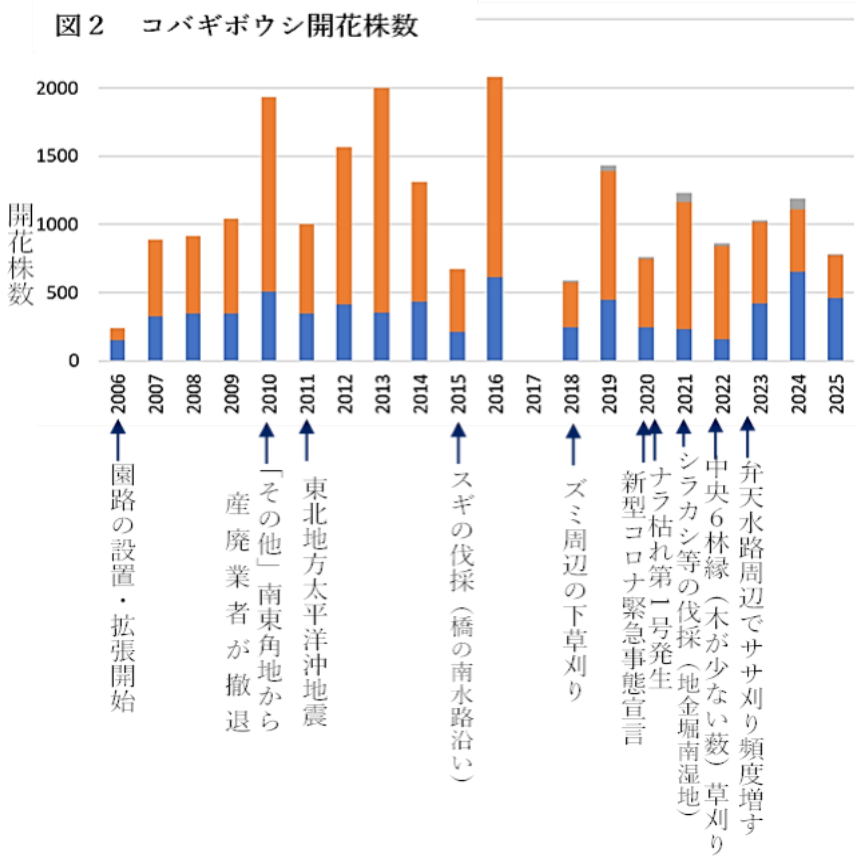
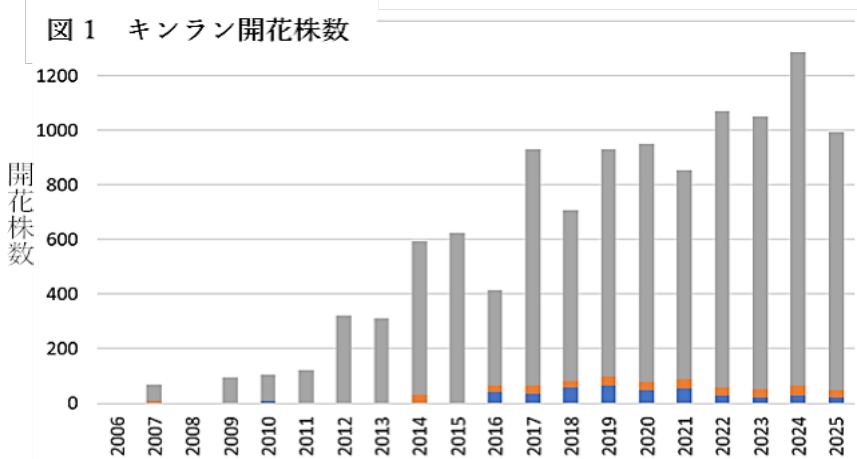
調査日：キンラン 4/29（6名） 5/3（8名）、コバギボウシ 8/2（6名） 8/8（1名）

結果

キンラン：結果を図1に示す。

各調査エリアで開花株数が減少。

2020年のナラ枯れ発生以降2023年度までに被害木約65本が伐採され、また倒木もあり林内にギャップが生じて「その他」では2024年には開花株数が増加したが、2024年夏以降はアズマネザサの繁茂が著しく、ナラ枯れ被害木伐採跡や林床で蘖化が進み、2025年の開花株数は大きく減少した（中央1-9: 1103株→891株 南1-3: 119株→95株）。



コバギボウシ：結果を図2に示す。

開花株数が減少したのは、弁天湿地の橋付近（弁天湿地北: 405株→217株）、地金堀南湿地の東方向（北3: 282株→71株）、林内（中央: 82株→3株）。弁天水路が長期間干上がり、特に橋付近ではタデ科植物などが水路内まで繁茂した。地金堀南湿地の東方向はアオキなど常緑樹が茂っている。

一方で、地金堀南湿地の木道付近では開花株数が増加した（北2: 87株→143株）。

※文中カッコ内（調査区：昨年度株数→今年度株数）。

生物多様性を維持する保全

キンランとコバギボウシの開花株数が保たれるような林床および湿性環境の適度な明るさ、また花粉媒介昆虫などが行き交える空間を確保し、園路からは来園者も多様な生物を楽しむ環境を目指している。

担当者：上田真佐江（文責）
橋本谷弘司

- 弁天湿地：水路兩岸（弁天池～橋）
- こんぶくろ湿地：地金堀兩岸の湿地
- その他：上記以外の北地区

豊四季の木釘記念碑とは

橋本谷 弘司

柏市豊四季の永寿稲荷神社の境内に「木釘記念碑」（1926年建立）があります。

江戸時代から明治政府となり失業した多数の武士等の救済策として開墾会社が設立され、第4番目の開墾地が豊四季です。豊四季一帯の原野に自生していたウツギを原料とした木釘づくりも重要な副業でした。ウツギは落葉低木（高さ2m程度）で、ほうき状に株立ちします。ウツギの枝や幹が中空になることからウツギ（空木）と呼ばれたそうです。

木釘は桐のタンスなどを組み立てるとき、下穴をあけた桐材に打ち込みます。木釘の利点は桐材と一緒に伸縮するというのと表面を鉤と一緒に削ることができます。

2024年4月25日発行の「東葛の樹木事典」（流山市立博物館友の会編）の中で、相原正義氏が「ウツギは木釘の原材料」とのタイトルで執筆されています。

下記●印の文章は、「ウツギは木釘の原材料」から引用（抜粋）させて頂きました。

- 木釘記念碑によると、木釘の副業は開墾当初にさかのぼり、大正初期から昭和10年代まで50～60軒が製造をしていた。
- 木釘製造者の心配は原料のウツギ不足であった。早朝徒歩でウツギ採りに出かけた。初めは家から比較的に近い酒井根、金ヶ作、そして五香六実や初富と遠くなる。時には足を延ばし船橋市行田の海軍無線塔が見えるところまで行き、束を背負って20時過ぎに帰った。
- 1923（大正12）年12月には柏・船橋間に北総鉄道（現東武野田線）が開通する。開墾が進み、旧小金牧のウツギ採りは限界に達した。木釘の仲買人は新産地からの鉄道輸送を考えた。新産地は房総半島のほぼ中央の大多喜町と現君津市亀山ダム付近。久留里線が1912年（大正1）に開通していた。輸送は上総亀山—木更津—豊四季と思われる。
- 戦後の木釘づくりは減少に向かった。春日部のタンス屋さんには和ダンス（桐ダンス）、茶ダンスづくりの注文が減って、洋服ダンスと整理ダンス（引き出しが多い）に変わった。
- 木釘の注文先が細り、木釘づくりはやめることになった。

ウツギ採りは限界に達したと記述されています。かなり前に、当NPO会員の酒井一男さんが豊四季でウツギを探したが見つからなかったとの話を聞きましたが、ウツギを採りつくしたことも影響しているのでしょうか。

柏市動画チャンネルの「木釘作り実演」（約1分）を見た目の感覚で正確ではないと思いますが、直径は2.5cm、長さ25cmぐらいのウツギの幹を縦に数回裂いた物を材料に小刀で加工して木釘を製作しています。ウツギは挿し木で増やすことができますが、成長するまでに時間がかかるため、ウツギ不足になったのだと思います。

なお、当園の地金堀の北側と一号近隣公園エリアで計10本程度のウツギを見ることができます。



木釘記念碑



ウツギの樹形（幹はまだ細い）



ウツギの花（5月）



ウツギの若い実（7月）



ウツギの幹（千葉県立中央博物館の外構で撮影）

